一戸謙三

歴年

詩集

浮彫叢書

Ⅱ

青洲文庫

一戸謙三

歴年

詩集

浮彫叢書

I

序

若冠の頃に父を失ひ、蒼白なる虚無の觀念を胸に刻印されたわたしは、貧苦の下積みになり、纖弱なる神經に惱まされて人生に絶望したが、詩によつてのみ、絶對の、永遠の世界に幽かに生き得るやうになつたのであつた。

しかし詩の路に歩み入つてからわたしは、模索彷徨して迷ひ、蹉跌し、落膽したことが幾度あつたか知れない。詩人としての素質についても常に疑問を抱いてゐたが、遂に三十年と言ふ長い年月の間、詩を棄て去ることは出來なかつた。

人生行路の涯に立つた今、かうしてわたしの生活と作品を回顧すれば、過去に於いてわたしは何を欲求して生き、さうして何を形成して來たか、と言ふそのことによつて、やはりわたしも詩人であつたのだと、はじめて言へる氣がする。

ここに、わたしの全作品の中から選んで、詩集「歴年」と題して世に送ることにしたが、作品のすべてについてわたしは、藝術たる詩として自信を持つてゐるわけではない。しかしながら、それらを通じてわたしと言ふ詩人の抒情と思索の譜を、心しづかに讀んで下さる人たちが、此の世の何處かにあるとは思つてゐるのである。

目次

序

黄金の鐘

白い月……一〇
崖の上で……一一
紫の靄……一二
黄金の鐘……一三
剪られた花……一四
髪の雪……一五

水松の下に

夜、重い鎧戸を……一八
渚……一九
小さな墓……二〇
古城の白壁に……二一
北風……二二
ああ、秋だ……二三

水松の下に……二四
屋根裏の室で……二五

月日

鴉……二八
月日……二九
別れ……三〇
古い鏡台……三一

夜々

影……三四
室……三五
夜々……三六
夢……三八
壁……三九

索迷

別辭……四二
非望……四三
破局……四四
沒落……四五
索迷……四六
泥街……四七
爛醉……四八
所有……四九

神の裳

うららかなる笛……五一
ありふれた林……五三
名もない散歩……五四
仄かなる蠟……五五
神の裳……五六
深みゆく額……五七

百萬遍（ヒヤグマンベ）

地藏さま（ジンジヨ）……六〇
百萬遍（ヒヤグマンベ）……六一
雜魚釣（ジヤコつり）……六二
早春（ハルサキ）……六三
猫柳（ベゴヅコ）……六四

梨の花（なしのハナコ）……六五
南瓜の花（トナスのハナコ）……六六
茨の花（バラのハナコ）……六七

跋　高木恭造

後記

裝幀　石澤修悅

黄金の鐘

大正十一年十月から
大正十二年五月まで

あゝ遺瀧（つるせ）なき追憶（つゐおく）の是非（ぜひ）もなや。

ポオル・ヴエルレエン

白い月

公孫樹の梢に白い月が浮く午後である。
裏背戸の黍の葉蔭で盜んだキス。
紅らむ頬よ。襟足のほつれ毛よ。
野菊が影うつす小川には水馬が群れて跳んでゐた。

あなたは花柏の垣に凭れ「おたつしやで！」と。
ああ、わたしの馬車は動く。行手にひろがる青田よ。
涙ぐむ眼にあてた蔀垂には桔梗の花がゆれてゐた。

崖の上で

小川は咳き、つぶやき銀色に流れ、
熊笹の上を紋白蝶がもつれて翔んでゐる。

崖の上の枯れ芝に坐るわたしの輕い疲れ。
梨の皮を剝くあなたの水々しい手よ。

未だ耕されぬ田に侏儒の森、その中の赤い鳥居。
白雲は雪斑らの山脈を徐ろに翳らせてゆく……

あゝ髪の香。紫の眼よ。
朗らかなこの時、あなたよ、その優しい唇を與へてよ！

紫の靄

紫の靄が人の群をおだやかに包み、
柳の葉がくれに街燈は琥珀のやうに輝いてゐる。

ゆたかな黒髪。桃のやうな頬。
あなたはつつましく歩いてゆく。
わたしらの想は微風にもつれ、そして流れさる。

ふと熱い手がふれる。水に映る陽炎よ。
蜜の沈默……
星星が金色の酒を滴らせてゐる。
ああ、わたしの胸に湧いて來るこのやさしさ、なつかしさは。

黄金の鐘

ポプラの梢に黄色い葉が閃めき踊る。
甘々しい光が青空に流れ、
教會の塔に黄金の鐘が輝いてゐる。

あなたは花束のやうにわたしに凭れてゐた。
すみれ色の睫毛。優しい呼吸。
あなたの唇の上に獨奏が燃え、
藤色の長い袖が朝の濱邊のやうに霞む……
朗らかに鳴りわたる鐘！
と俄かに目を開けて微笑したあなたよ。
櫛が青疊に落ちてその飾がきらめいてゐた。

剪られた花

空は錫箔のやうに曇り、
みだれ降る雪は、蒐色にしめつた道の上に消えてゆく……

あなたの輕い足駄の音を、
わたしは默つて聞きながら歩いた。
ゆれる淡紅色の長肩掛よ。蛇の目の傘よ。

昨日、わたしらの散歩は樂しかつた。
山裾に消えのこる雪や、風になびく枯れ芒や、青空や……

落葉したアカシヤの林を
鳥が一羽啼いて飛び過ぎる。
すべては、剪られた花のやうに香が失せるであらう。

道の果てに、あなたよ、停車場がわたしらを待つてゐる……

髪の雪

歩廊の洋燈のゆれる焰に、
あなたの姿は小鳥のやうに寂しく照らされる。
その髪には雪が白く散りかゝつて……

鋭く呼子が鳴る！……

列車は動く。燦々とわたしの胸に刻みつく濡んだ瞳よ。
――「さよなら。ああ、さようならあ……」

雪の笹縁の窓から、
長くわたしは身を乗り出してゐた。
次第に縮少してゆく灯の花の停車場、碧玉の信號燈、熱した煙にふれる雪……

水松の下に

大正十三年四月から
昭和二年五月まで

わたしは秋の空のやうに悲しい戀をおもふ。

ジャン・モレアス

夜、重い鎧戸を

夜、重い鎧戸を押しひらけば、
林のかなたに窓が明るい。
ゆるやかに十時が鳴り、
河瀬の音は高まる。
ああ、わたしは死ぬばかりに淋しい！

あのひとの古い手紙の束を、
昨日わたしは水松（いちゐ）の下に埋めてしまつた。
この心を誰が知らう。
そして月日は、これから
わたしの上に塵のやうに積みあがるばかり……

渚

斷崖の下の、
蒼い波がよせくる渚の捨て石に坐り、わたしは
忘れてゐたあのひとの哀しい誓を想ふ。

双の手をあげ、沖の
侘びしい白浪に呼びかけてみたが、それは空しい！
砂の上に取りのこされた網よ、傾いた漁船よ。

眺むれば、砂の丘に
はかない言葉のやうにわたしの言葉がつづく。
——柔かく啼きすぎる鷗よ。

と、たちまち立ちあがる烈しい風は、
わたしの沈んだ額を打ち、
白砂を飛ばし、遠くに追うてゆく。

小さな墓

濡つた石段を、雪駄で
あのひとの墓を想うて來ると、
枯れ芒の穂のなかに、白々しい太陽が沈む。

本堂の屋根にも、苔むす敷石にも
銀杏の落葉がおびただしく散りたまつてゐる。
ああ、箒鍬にかこまれた小さな墓よ……

暮れかかる行手、松林のはづれに
荒々しい浪が岩々に泡立ち、
その上に低く翔んでゐる灰色の鷗。

古城の白壁に

古城の白壁に、銀杏の落葉が散りかかり、
曇り空を遠く渡り鳥の群は消え失せる。

常春藤(きづた)は高い城門を包みかくした。
燕の巣はもう空虚(からも)になつた。ああ、わたしの心は重い！

濠の水に日影はうすれ、白菊の花は風にゆれる。
そして、微かな雨が降る、松の林に、崩れた石垣に……

北風

秋の林檎園の
軋る破れ戸を出ると、
積藁や鎮守の林が刈り田のなかにある。

欅の梢に集る椋鳥の群……

遠い山脈には、はや、雪が白く降りかかつた。
松並木の道の果てに、
遠ざかつてゆく空馬車の響……

ああ、北風が身に泌みる！

柳の切株がならぶ堤に立てば、
微かな波が光る沼の汀で、
寂しい枯れ蘆の洲がさやいでゐる。

ああ、秋だ

薔薇の花の、淡い陽ざしが消え、
疎らな桐の葉かげに、青ざめてゆく深空の色……

わたしの指々は冷える。
枯れ草の上に、わたしの影はうすれる。

今朝、アカシヤの金色の落葉が、
霧にうたれて泥道に散つていつた。

夕靄に漂ひ、ふるへる紫苑の花々、
そしてわたしの胸を打つ晩課の鐘の音！……

——ああ、秋だ、秋だ。冷い麥見の奥に、
哀へはてたわたしの頬の色よ、亂れた髪の毛よ。

今夜も、塵だらけな机の上に銀時計を置き、
電燈の下で眞白な本の頁をひらいてみよう。

水松の下に

老松の蔭の四阿、
そして空しい朽ちた卓子に、
たちまち薄れてゆく秋の夕映……

水松の下に蹲り、
はかない想ひを蒼ざめた漆の水に描くとき、
暗い林のなかで鴉が羽ばたく。

すでに、わたしの頁は閉ざされたのだ。
今にしてわたしは、
過ぎさりゆく時を惜しみもしない。

城門も、苔むす石橋も、
もはやわたしには話しかけない。
幽かな風に、ああ、木蔦の枯葉がさやぐばかり……

屋根裏の室で

矢車草の花が散り失せてから、
屋根裏のわたしの室に
いつしか花瓶は塵にまみれて空しくなつた。

ああ、籠のカナリヤよりも侘びしく、
日に日に衰へる日射しを浴び、わたしは老いる、
秋空に別れてゆく雲を數へて……

月日

昭和四年十二月から
昭和七年五月まで

「夢」は第二の人生である。

ジェラル・ド・ネルヴァル

鴉

珈琲を啜らうとして皿を取りあげると、細長い鏡のなかに、妻が華奢な襦袢をひらきながら立つてゐる。

何處へ行くのか。わたしは振り向いた。柱時計がとまつてゐる。「ミオ！……」目を閉ぢると仄かな聲が耳もとで應へた。

屋根裏の室はもう薄暗い。高く幽かなガラス窓に枯れ枝と新月が映つてゐる。わたしは歩つた。鴉が、皺がれた聲で啼きしぶつてゐる……

月日

鴨居に影が折れ曲つて誰かが室を出て行つた。柱暦をめくつた指は、妻よ、お前のではない。またわたしのでもない。お前は疊の上にお伏しになつて——泣いてゐるのか。

わたしとお前との間から誰が出て行つたのだらう。わたしは立ちあがる。そして障子を開ける。廊下に幽かな跫音がしてゐる。それは月日を散らす、わたしから、そして、お前から。

わたしはお前を愛してゐた。秋の薄日が額を照らすやうに。今わたしはもうお前を愛さない。何事が過ぎたのだらう。古びた襖と空しい机と。それらがお前の姿を透かして傾き沈みはじめる。

別れ

わたしの列車は幽かに浮みはじめた。歩廊で、手をあげたまま妻は次第に褪色する。わたしの顔に信號柱(シグナル)が倒れる。白い煙はたちまちアカシヤの林を蝕んでしまふ。

それが別れであつた。わたしは硬い坐席で地圖をひろげる。そして、青い洋(うみ)を見つめる。いつしか夕焼が染めてゐた、窓硝子を、網棚の麥藁帽子を。

わたしは立ちあがる。誰もゐない車室を横切る。もう淡暗い。疊つた鏡、折れ曲つたわたしのネクタイ。やがてわたしは、鏡のなかに歩み入つて嗽をする。

古い鏡台

さわら垣を折れると冠木門が立つてゐた。敷石路は下駄に音立てない。玄關には影が充ちて杉板が割れてゐる。わたしは座敷に坐つてゐた。欄間から枝が出てゐる。そしてそれは、まるめろの花をつけてゐた。わたしは傾いた疊から疊を歩きまはる。古い鏡台の中に妻は寂しく囚れてゐた。わたしは眼を閉ぢる。

雨戸に雨が降り出した。そして座敷のなかにも、幽かに。長い廊下をわたしは暗く歩いた。座敷がいくつも續いてゐる。その終りの障子を開けた。欄間から枝が出てゐる。まるめろの花をつけてゐる。しかし鏡台の中には妻がもうゐなかつた。空虚(から)な床の間を背にしてわたしが蹲つてゐる。

わたしは冠木門の前に立つてゐた。見上げると蝕んだわたしの名札がある。わたしはそれを後にして歸る。さわら垣を折れると秋の河原。わたしは永い間夕映を眺めてゐた。

夜

々

昭和六年二月から
昭和七年四月まで

私は浮燈だ、それは海を導く。

ピエエル・ルヴェルディ

影

不安な空だ。雲が低く下りて來る。壁の上を影が歩いてゐる。敷石道に足音が續く。

巨きな梢がゆれる。目に見えない翼が過ぎてゆく。夜が落ちた。壁の中に木蔦が沈む。

空もない、また梢もない。淡白い敷石道だけが延びてなほも足音が續く、何時までも。

室

夕暗が苑をたちこめる。私は待つた。しかし鳥のひとつの叫びさへ返らない。

軋る窓。硝子の中に動く白い指。そして私はまたも卓子に椅子を寄せる、洋燈の下に。

夢は私の掌に生れない。床下にみだれる波の音。何時から微が私の額に刻みこまれたのか。

私は洋燈を手にして立ちあがる。私を圍んで何物かが暗く翔び去る。私を漂はせる夜がまたも來た。

夜々

夜が私の上に集る。聖書の羊皮紙の上に手を置いて、私はエホバの白い靡を嚼る。

眠れない夜がまたも私を押め去つた。

むしろ此の洋燈は吹き消さう。そして私は夜を吸ふ、それが身のうちから溢れ出るまで。

★

双の手で頬を支へた白い顔がある。これは誰のだらうか。洋燈をかかげて私は鏡を見つめる。深い闇のなかに雪が降りはじめた。

夜で充たされた窓のところに私は歸る。方形のなかにさまざまな鳥を飛ばす。指先からそれは眞青になつて落ちて行く。

天井に昏く渦巻くもの。そこに私がゐる、と思ふまにたちまち漂ひ去る。

鏡に白い紗の霧が濃くなる。そして擯けた私がその上に浮んでまた沈む。

★

瞳を閉ぢたまま敷布とともに私は浮みあがる。さうして星空のなかへ昇つて行つた。限りない靜さに染まりながら。

遠いところで呼ぶものがある。反響のやうに。圓盤のやうに飛び去つた人人、彼らが私を呼ぶのだ。私は應へようとする、暗い臉の裡から。

しかし時間は集り縮り、すでに固まつてしまつてゐる。

夢

私は低く高く翼をのばした。人間の追憶をふるひ落すために。私の翼はまだ弱い。しかしよく透る。何處までも雲を越えて。

楡の梢の巣にあつて　私は眼を瞠る。柘榴色の太陽が沈み風が流れる。そのなかに私はぢつと瞳をさらしてゐる。

私は聞く、地球が廻るのを。白い星座が傾きかかるのを。私は夢のなかで顛れてゆくのを。何の關りもないことながら。

壁

壁の中から、私は煙草のけむりを吐く。彼らは貧しい卓子に集り、暗く話してゐる。

私の煙草は灰にならない。彼らは卓子と共に遠ざかり始める。闇の天井から落ちる風、それは死であらうか。

彼らは消えた、そして卓子も。また私も、壁の中にはゐない。壁に煙草が剝まれてゐるだけだ、一本の白骨のやうに。

洋燈がひとつ殘つてゐる。ああ、何たる追憶であらう。

索迷

昭和七年九月から
昭和八年三月まで

おお！この狂へる市街よ、果しらぬ夜よ！

アルテユウル・ランボオ

別辭

悲愁の丘に訣別を投げつけた私は、身を風の眼に曝さんとす。
世界を貫く非情の氾濫。その昏迷の波に漂ひ出でては、陰々たる過程のみが
沒落するであらう。
凶鳥は擾れ、苛立だしい夢が渦卷き、慘酷なる合唱が起る。かうして虛妄な
る仮象は私から四散した。
砂文字の羅列。青春の暦は風化しつくした。虹色の霧に透かされる追憶の
壁。黃金の曙。燠のやうな日錄。憶へば何たる痴愚の繪本ではあつた。
典雅なる空は黝む。その下に私は木栓のごとく浮ぶ。ああ、印度藍の水に染
まり、永劫に私の漂浪は決定された。
さらば、スパルよ、友よ。再び逢ふ季なしと知れ。

破局

私の彫りあげた秋の美神は微塵に碎け去つた。菫の花が春だと告げたとき、
果してこの破局を豫想し得たであらうか。
脆弱なる太陽は止まらず。剝奪された防風林から涯もなく亂散する鴉。瀝青
の天を目がけ、非情の街道は昇つてゆく。
描けば、陰慘として肋骨を刺す風景。何ものをも北から北に。何人をも否定
から否定に。不吉なる鎧戸は私にも閉ざされた。
齒車のやうに軋る罪と悔。純潔なる星座よ。私は一切の背景に別離を告げ
た。さて私の採り上げるのは悲劇の献立。

非望

暦の下の明るいプログラム。間違ひのない歴史の繰り返し。すべからく人はさうした風に生きてあるべきが例外のない課業と言ふものであらう。

柔かなる笑を以つて私を慰撫せんとする親愛。ありふれたる軌跡。そして飽くことのない蛆蟲の日々が堆積する……

ああシリウスよ。ぎりぎりと臓腑をしめ上げるきびしい意志。それなくして何の生活であるか。神よ、汝の常套句を私は踏みにじらうとしてゐるのだ。

齒咬みに滴る歌血のごときもの。よし零の世界が私の終焉であらうと、何物もこの非望を押しとどめることは出來ぱしまい。幸と不幸とを一瞬にして中和する稻妻。私の半生の閲歴は抹殺されつくした。かくて私は私の涯にまで來た。

ああ私の生きんとするのは孛星の座であらうか……

沒落

抑も太初に神ありしか道ありしか。私はかかる歪曲せる律語を好まぬ。私にとつて神と道との先在何れにあつても關心なし。

ああ鐵鎖を咬み一切を奔流として否定するは誰か。私は掌をもつて世界を斷らんとして遂に停立するのみ。私に遺されたる白札は何んであるか。

悲哀曲は終りあつて然るべきだ。昨日を針金をもつて縛らんとする、それは薄弱なる展望でしかないだらう。

私はひたぶるに冬を俟つ。青と白とを以つて格子のごとく曠野を飾るその立体圖に沒落しよう。

ああ見よ。すでに灰天は雪片を墜さんとす。されば私は鴉の碎片を卒然として投げあげたのである。

索迷

冬の射る鴉よ。この天界の齒型によつて胸は鋭く刻みつけられた。遁れることも出來ない掟が行手に立ちふさがる。

蘆の呼ぶ聲も涸れた洲に、凶兆の雲のいくつかを逐つた。私を索迷させる鹽讃の路。過去のやうに川は私から背を去り、凋落した蓬のなかに私の來歴が沈溺してゐる。

世界をつくして私の光榮は鍍ばされたのか。あらゆる天災の混濁。その長るべき圖案を渉らねばならないのか。

錫の太陽。惡意ある霧よ。愴然として昏れる空に、呪はれた生誕を再び刺青する。

泥街

不遜なる館物と絶えざる罵言と引ん曲つた顏と、それらが渦卷き移りゆく道路。赤くまた黑い泥濘に立ちすくむ私はさて何方へ行くべきであるのだらう。陰鬱なる風は私をめぐつて蠢歴する。

蜥蜴の太陽は昇つてまたずり落ちた。汚辱と姦淫とあらゆる贋物(いかもの)によつて鍍金される街。霧は沈澱し惡熱の体温計は上下した。これが一体人間の世のことであらうか。今更めかしく哲人ぶつてかう思考するのが土台ばかめでたいと言ふものであらう、

この仇敵。私の肺臓を浸蝕する謀計。鉛鏝の壁に嵌めこまれた出來損ひの煉瓦が私だと。何たる愚劣の統計表。遁れんには一盞の毒酒あるのみか。ああ眩耀たる洪水よ。君が大洗濯はただに私のためばかりではないであらう。

爛醉

この勝場の饗宴。血の槽を傾ければ焔と泥の渦。淫婦らの荒々しく集められる眞黑な靡々。燃えあがる酒盃と沈み下る氷河の卓子。

地底の酒場の狂へる午前一時。浮沈する胞子のやうな人間どもに何事が經てゆくのであらう。詐られた方程式の蛇。私はここに墮ちて、罐の底まで醉ひ痴れようと言ふのか。

闇黑を過ぎてゆく鐵の鎖……

晃斑の幻覺。たちまち叫びは惑亂する。大時計の針は拐り取れ、饒舌の椅子、鏡等はギラギラと碎いてしまへと、私の肺臓は沸騰する。

ああ、惡と言ひ罪と言ふ。しからば何をか善と言ひ德と言ふ。轉變する賭博盤。その一瞬に生と死の鈔を打ちこんでしまへ。

爛醉の私にかくて惡の門は喘鳴として展かれる。

所有

ああ季節よ。鞭よ。あまりに私は鴉を啖ひ唇をむしりつくした。生爪を剝ぎ、掌に錐を穿つなど。何たる愚かしい倫理であつたらう。

冥府の辻に己を索し、蒼天を裂いて火坑にも墜ちた私には、幾何の悔恨が遺されてあるか。

濃青の髮はざつくりと切れ。乳臭い招待は辭し去らう。地獄の炎は青くも黑くもないのだ。在るものは鏡の模造であると告げる。

刮目せよ。この洋々たる所有。花よ、泡立つ春よ。劉亮として星座は私の身をめぐる。ああなつかしのミユトスよ。

しかしこれもあれも夢のつながりか。人間の脆さと自負と。私の額には新しい序がまたもキラキラとはしてゐるものの。

神の裳

昭和八年十一月から
昭和九年八月まで

主よ、時です。

ライネル・マリア・リルケ

うららかなる笛

曇れる壁を嗤ふことなかれ。今は直にわたしの坐つてあるのを確かめ得た。肌を荒らすこの雪も、何らためらふ途ではない。

永い古暦ではあつた。しかし琴は正しく放たれたのである。傷ける机よ起て。わたしの拍つ手に、うららかなる笛を昧へ。

傾けるわたしの室。それはさまざまな汚れた手に支へられてはゐるが、しかし空の下にあると知る。

いささかの水を食らひ、またも乏しい窓に生くるとは言ひながら、もはやわたしは風である、水である、魚である。

ありふれた林

ありふれた林を吸うて、「落葉、それは火の匂がする。」などと掠めた。さもしい言葉よ。むしろ梢を破る夕空に聞くがよい。

美しさもない。また哀しさもないのだ。世はこのやうにある。わたしに知られぬプログラムを展げて、わたしに關りなく。

いかめしく考ふること勿れ。路は路であり、草は草である。そのやうに歩け。わたしの返る土がある。靴をつらぬいて神が呼んでゐる。

夕映よ、沼の枯れ蘆よ。別れたものは柔かくまたわたしの手に集る。わたしは、さりげなく歸ればよいのだ。

名もない散歩

泥くさい街から放たれた口笛よ。風よ。名もない散歩が土橋をわたれば、あはただしい試みが消える。

もとより夜をひらくと言ふのではない。約束された月が、アカシヤの路から生れたとは言ふものの。

やがて、淡く慰められる荒れた村。このおぼろげな地圖には、餘りにするどい汽笛ではあつた。

しかし夕の言葉に閉ざされたわたしは、古ぼけた電柱を信じ、その夢を歩いてゆくのではあつた。

仄かなる爐

影たちあがるこの夕を、室に招じてわたしはひとつの言葉をも散らさぬ。美女櫻をひらかせ、その風を人に送れ。

今日の落葉を枝折として、さてわたしは何を求めるのであらう。散りはてた空よ、波よ。今さらに止め得ぬ姿ではあつた。それもよし。

烈しい火をわらふことなく、ありのままに人は行かしめよ。わたしはわたしを閉ぢる。

ああ神よ。むざんなる琴は忘れて下され。仄かなる爐にひとり、夜を沈めんとするわたしなのであれば。

神の裳

途から途を、日に月にわかれて、安らかさも慰めもすでに失はれたと、しかしそれは言葉に過ぎなかつた。

わたしにもひろがる神の裳、夕映をしめやかに受けとれば、ここに蘆のこゑもある。沼は幽かに村は淡く、今こそは、三十年の季節を若くして、おのづからにひとりを守れ。

まことや、わたしはわたしであると辿れば、充ちあふれる存在ではないか。さざめく楡の木よ。たとへわづかなりとも、このよろこびのためにわたしに輝け。

深みゆく額

荒れすさぶ心よ。アカシヤに染められて林に入れば、この野すみれの花。密しいあこがれは放ちやれ。ささくれた路も、おもふに十全の世界へと通ふではないか。

青空に折れかさなる枝と葉と。水は千年ながれてもその青さをとどめ、野茨の花を越つては極りを知らぬ。ああ言葉から言葉に。何故におぞましい仕業(しわざ)ぞや。

その囚れになほわたしがあると。荒れすさぶ心よ。さて今は見よ、新しい切株を。日は高く、深みゆく額に風は透く。手をあげて、たちまちに唄を抱けよ。

百萬遍（ヒャグマンベ）

昭和九年十月から
昭和九年十二月まで

一つアえエー木曾新田（キヅクリシデン）の相野村（あひのむら）
村のはづれコの……
「彌三郎（ヤシャブロ）の唄」

地藏さま

鼻欠の地藏さま。
風ア吹ゲバ、
上ガらかぶさる胡桃の葉……

雜魚釣

青エ空……
飛ンで行グ櫻鳥。
釣竿サ止まて居る蜻蛉コ。

堰蝦の草叢サ坐まて居で、
雜魚釣てるこの童、
臍出して。

荷馬車の音アしてる……
眠てエな。何時まンでも、
動ガねエ浮藻コだネ！

百萬遍（ヒヤグマンベ）

秋（アキ）の日ネ、
暖（スグ）だまらねエ百萬遍（ヒヤグマンベ）。

何時（エツ）まンで僕（ワレ）ど
白楊（ヒエツ）の林ゴト閑（ヒマ）エで居（エ）るの力……

早春（ハルサギ）

花柏垣（さわらがき）ン下サ、
えッつね生（ス）エでる蕗薹（パツキヤタツ）。

猫柳

田の畦サ轉倒たて、
何ア痛でバ！

愛子のちょンコだ、
もう泣グな！

小川の水コで、
手コ洗へ！

さアさ鼻汁かめ、
あれ見ながガ！

猫柳取て呉るア
泣グンでねエ！

梨の花

鶯公鳥アまンだ、
どんよらドした空サ啼エでるアネ！

梨の花アみンな。
昨夜の雨で、落ちでしまたド……

南瓜の花

南瓜の花ア黄色だネ…
雪隠の屋根サ咲エでるアネ…」

茨の花

街道端ね　埃かぶて、
それでも咲エでる　茨の花……

跋

昭和二十一年十一月一日の朝であつた。私は垢や埃に汚れた服にリュックを背負つた引揚者の異様な姿で、弘前驛の雜踏の中で、計らずも一戸氏に會つた。久々に踏んだ郷土で最初に會つたのが氏であつた奇緣に私は今更のやうに感動した。私は外地から後生大事に持つてきた外國煙草を二人で吸ひ合ひながら、師の福士幸次郎氏の計を聞かされたのもこの時である。

これは氏との三度目の邂逅であつた。最初は昭和三年であつたか、私が外地へ出掛ける直前だつたと思ふ。二度目は十六年頃歸省した時で、何れもごく短い時間話し合つたばかりである。しかし最初の邂逅以來、氏は私にとつては常に先達となつた。二人は遙に土地を隔て、それぞれ別々な道を歩みながら廿年の歳月は過ぎ去つた。その間、氏からの音信は一週間と絶えた事がなかつた。詩といふ嶮しい道を氏の獨り踏み入つた跡を辿つて、その後から私はついて行つたにすぎないのだが、氏は序文の中で氏にとつては詩が「救ひ」であつたと云つてゐるが、私にとつては詩は「迷ひ」でしかなかつた。それにしても氏の足跡がなかつたならば、私のこれまでの行路は全然別樣なものであつたらう。これは決して過言ではない。それ程、氏の私に與へた精神的な影響は決定的なものであつた、私は氏を友人以上に思つてゐるのもその爲である。しかしこの事は恐らく決して私一個人だけではあるまい。氏のこれまでに投じた影は、私以外にも多くの人々に及んでゐる筈だと思ふ。この事實は今後、現在の混亂が鎭靜するに從つて次第に明瞭に人々の心の裡に浮び上つてくるだらう。この点があればこそ氏を眞の詩人として更に大きく位置づける所以である。

昭和二十三年十一月二十一日

高木恭造

後記

此の詩集を、わたしの全作品約五百篇から選むについては、その初期のものと後期のものとを除き、「歴年」時代のものも出版の事情によりかなりの數を省いてあるが、「黄金の鐘」篇から始まるわたしの魂の遍歴がどうして「百萬遍」篇に到つたかその巡路は、これだけ集めてあれば理會されると思ふ。

作品のなかで「黄金の鐘」篇の最初の四篇は故福士幸次郎氏によつて「日本詩人」(新潮社發行)大正十二年三月号に推薦されたものから選み、「索迷」全篇と「衰々」篇「月日」篇の一部は百田宗治氏主宰の「椎の木」誌上に發表したものであり、その他は鄕土の新聞「東奥日報」「弘前新聞」の文藝欄や雜誌「黎明」「バストラル」「青椅子」「鶏」「座標」「北」「砦」「府」等に發表したものである。方言詩「百萬遍」篇は、津輕エスプリ運動と名づけレジョナリスムに立つてわたしは、マルキシスムの連中やアルテイザン詩人と激しい論爭を行ひながら書いた作品の一部である。

わたしの初期の作品には先人模倣の習作が多く世に出すほどのものはない。後期のものにはプロソデイの研究作品として頭韻ある十二音句四行によつて構成される定型詩「聯」と、戰爭中のあの頃では發表が許されなかつたやうな身邊雜詩その他がある。これらは後日に機會があつたならば詩集としたいが、わたしとしては、昭和十一年に刊行した津輕方言詩集「ねぶた」と此の詩集を世に送つただけでも、窮乏のうちに脆弱なる身体を支へ五十歳まで生存して來た意義は、とにかくあつた、と思ふ。その点これを浮彫叢書第二册として出版して下された青森美術社主竹浪次郎氏の御好意には深く感謝の意を表したい。

最後に、詩人として小説家としてわたしの畏敬する多年の友人高木恭造氏の跋文を得たことと石澤修悅氏の裝幀には著者として誠に感謝したい。

浮彫叢書
…2…
詩集
年歴

昭和二十三年十二月一日印刷
昭和二十三年十二月十日發行

定價七拾圓

著作者　一戸謙三
刊行者　弘前市下鞘師町一〇　竹浪次郎
印刷所　弘前市富田大野　奈良印刷所
刊行所　弘前市下鞘師町一〇　青森美術社

限定200部の内
第139號

森 社 美 術

浮彫叢書
…1…
高木恭造著　石澤修悅裝
肉體の圖
附・風塵
言は肉体となりて我らの中に宿りたまへり
――ヨハネ傳――
限定二百部
典雅美本
定價六十圓

貴重書